

在住外国人 インタビュー

異なる文化に触れると、
別の考え方が
あることに気付き、
新たな視点を見出すことになります。



トーマス・ シュピンレル氏

1992年から滋賀県甲賀町在住。
現在、通訳・翻訳会社の代表取締役を務めるほか、
県内外の大学や企業でドイツ語、ドイツ文化につ
いて教鞭をとる。
また、地元甲賀町での国際交流事業にも広く携わ
っている。

日本にいられて20年ということですが、生活してみて滋賀県という場所は
どうですか？

私、最初10年間は京都に住んでいたんです。生まれて育ったのはドイツの「ボーデン湖」という湖沿いにある「ユバリンゲン」という小さい町なんです。

「湖」には独特の雰囲気があるでしょう。時々それが恋しくなって、琵琶湖は京都に近いしよく訪ねたんですよ。けれど、やっぱり住むなら「水がいい、環境がいい、自然がいっぱいある、そういうところに住んで仕事したいな」と思ったんです。4年ぐらいかけて適当な住まいを探し、甲賀に引っ越して来たんです。

今はすっかり地域にも馴染まれているようですが。

日本では、ことに田舎では、いっぺん信用ができたなら横の繋がりが「親戚関係」「友達関係」になるんですね。最初は、「よそ者」なんですけれど。

甲賀町でいろいろな交流活動をされているそうですね？

そうですね。地元の方も、田舎にはそんなに外国人が多くないから、興味があるんですね。実は、私の来日した目的は「お寺のお坊さん」だったんです。京都の妙心寺では「禅」の勉強をしました。アジアの中でも日本には独特の文化が沢山あるんですね。我々ドイツ人にも勉強することがたくさんあります。「弓」とか日本の「武道」とかも勉強しました。そういうのも勉強して持って帰りたいんです。お返しに、ここでは「ドイツの文化」を教えています。文化の「イン

ターフェイス」と言ったら偉そうに聞こえるかもしれませんね。(笑)

初めて日本文化に興味を持たれたのはいつごろですか？

15歳ぐらいの時ですね。ドイツの学校でも「いじめ」があるんですが、私はいじめられるほうだったんです。ですから、「空手」とか「柔道」のクラブに入りました。そのクラブで先生に身体を鍛えるだけではなくて「メンタル」な部分、「空手」のスピリチュアルな面を紹介され、「禅」も紹介されたんです。「身体を鍛えて相手を倒す」ということで始めたんですが、やってるうちにだんだん「いたずらされても無視できる」ほど強くなったんです。また、「禅」というのはちゃんとした先生に指導を受ける必要があると知ったのです。で、学校を卒業した二十歳の時、片道チケットと8万円を持って来日し、6ヶ月間、天龍寺にいたんです。

最近、日本の若者はあまり日本文化を研究したり追求したりしていないと思うんですが、若者の「日本文化離れ」についてどうお考えですか。

「文化」には「歴史的なもの」と「今日的なもの」がありますね。ルーズソックスとか金髪とか、大人は嫌がるんですが、これも日本の文化なんです。日本の独特の服とかセンスとかは外国にはないから日本文化なんです。「禅」とか「茶道」とかは、ある意味で日本の「歴史的な文化」です。が、今の、生きている人間がやっていること、それは「現代文化」です。

滋賀県には外国人の方が増えてきて現在23,000人以上の方が外国人登録をされています。滋賀県民56人に1人は外国人という状況です。今後、地域で外国人と共生し、豊かな社会を作っていくためには、我々も国際感覚を持つ必要があると思うのですが、どういふふうにお感じになっていますか。

どこの国へ行っても外国人差別というのがあるんです。でも、私は日本で差別はされたことは一度もありません。しかし、日本は島国ですから、イギリスでもそうですが、ナショナリスティックで「我々は特別」という意識があるんです。そういう意識があると「外国人」は「よそ者」という考えになり易いんです。我々ドイツ人は隣りがフランス、イタリアで、毎日、日常生活のなかで国境を渡って行ったり来たりしているんです。ですから、言葉は違っても考え方はほとんど「同じ」なんです。

外国人は「別の人間」ではないのです。「同じ人間」で、ただ「文化」とか「考え方」が違うというだけなんです。

では最後に、国際交流という点で特に印象に残ったことは？ 参加されたイベントも多いと思うんですが。

花火、太鼓の祭りとか、そういうイベントですね。国際交流というより「小さい村の祭り」、あちこちでやっている日本の伝統的な祭りですね。我々外国人には楽しいんです。もうちょっと音楽的なイベントがあればいいんですが。言葉が通じなくても音楽は通じますから。いろんな国のミュージシャンを呼んでみんなで音楽的なイベントを楽しむ、いいですね。